

## 下仁田ネギの栽培に関する一、二の考察

Consideration on cultivation of Shimonita green onions (*Allium fistulosum* L.)

渡 邊 悟\*

Satoru Watanabe

キーワード：下仁田ネギ，原種，系統，仮植，定植，2回植え栽培

Key word : Shimonita green onions, progenitor, variety line, temporary planting, planting, cultivation planted twice

### はじめに

「下仁田ネギ」は、下仁田町を中心とする甘楽・富岡地域やその周辺で栽培される伝統野菜である。下仁田ネギは非分けつ性の一本ネギで、いわゆる白根と呼ばれる葉鞘部の長さが 20 cm前後と他のネギに比べると短く、直径は 5 cm以上にもなり、ずんぐりむっくりした草姿である。

生で食べると非常に辛いですが、鍋物やすき焼きなどで煮るとその肉質、風味が良好で、独特の甘みととろけるような食感他のネギの追随を許さない。また、当地域の豊富な日照時間と小石混じりの重粘土壌が下仁田ネギの味を作り出しているとされ（菊地・永井 1986）、他の地域で栽培しても同じ味は出ないと言われている。

下仁田ネギがいつ、どこから来て当地で栽培されるようになったかは多くの説があるが定かではない。しかし近年、下仁田ネギに関する記述のある古文書が少なからず発見されている（里見 2003）。

現在最も古い記録とされているのが、下仁田町を含む旧甘楽郡・碓氷郡16ヶ村の名主取締であった桜井家に伝わる古文書である。これは1805（文化2）年11月8日付けで、幕府の旗本支配下の役人から発せられた文書で、「ねぎ式百本、（中略）急々御用に候に付き、相廻されべく候。ねぎ賃相かかり候ても

苦しからず候間、少しも早く相廻し候様取り斗らい申されべく候」との記述があり、日付を考えると歳暮用として大量のネギの調達を依頼したことがうかがえる（里見 2003）。

また、高崎藩主の日常生活を書き留めた「高崎藩御書留」には、1832～1833（天保3～4）年に、当時の藩主松平輝承が親交のある殿様に下仁田ネギを贈答品として送った記録が残されている（里見 2003）。下仁田ネギは別名「殿様ネギ」とも言われている。これは徳川將軍家に献上されたことに由来すると言われているが、実際にはそのような記録は見つかっておらず、むしろ松平氏のような大名が他藩の大名に贈ったことによるものではないかと推察されている（里見 2013）。

筆者は今から約30年前の平成の幕開けの頃、県の地域機関である富岡農業改良普及所下仁田出張所に勤務し、農業改良普及員として下仁田町役場やJA下仁田町と連携しながら下仁田ネギの産地振興に携わった。そして、今日の下仁田ネギ産地の基礎を築いた松浦源一郎氏をはじめ、町内の多くの農家の方との出会いの中で下仁田ネギの歴史や栽培技術に触れ、その奥深さに強く興味を持ち続けてきた。本稿は、当時農家からうかがった話や研究データを基に下仁田ネギの歴史と栽培について一、二の考察を試みたものであり、伝統を次代に伝える一助になれば

2021年12月28日受付。2022年2月28日受理。

\*群馬県農政部ぐんまブランド推進課 〒371-8570 前橋市大手町一丁目1-1

と願っている。

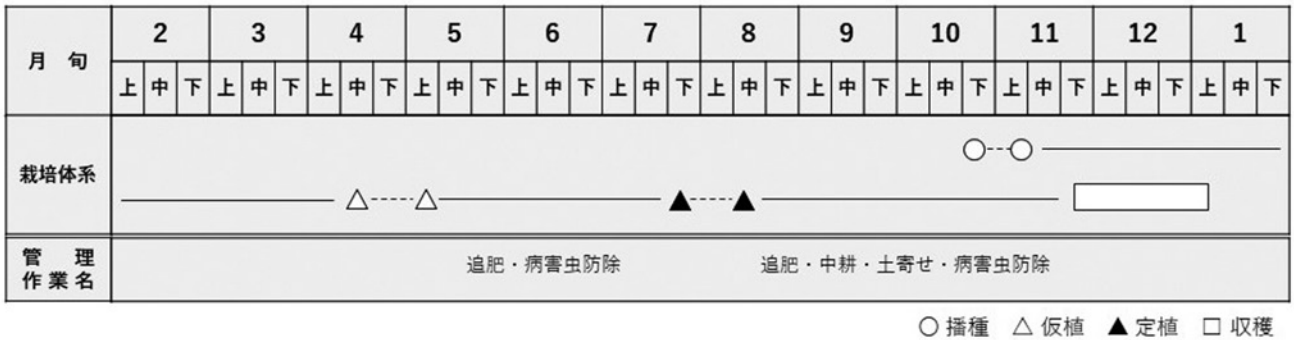
### 下仁田ネギの栽培技術の概要

下仁田ネギの栽培は、10月下旬～11月上旬に播種（タネまき）することから始まり、収穫まで14～15ヶ月も要する大変手間のかかる特殊な野菜と言える（第1図）。播種後、翌春に草丈 30 cm程度まで生

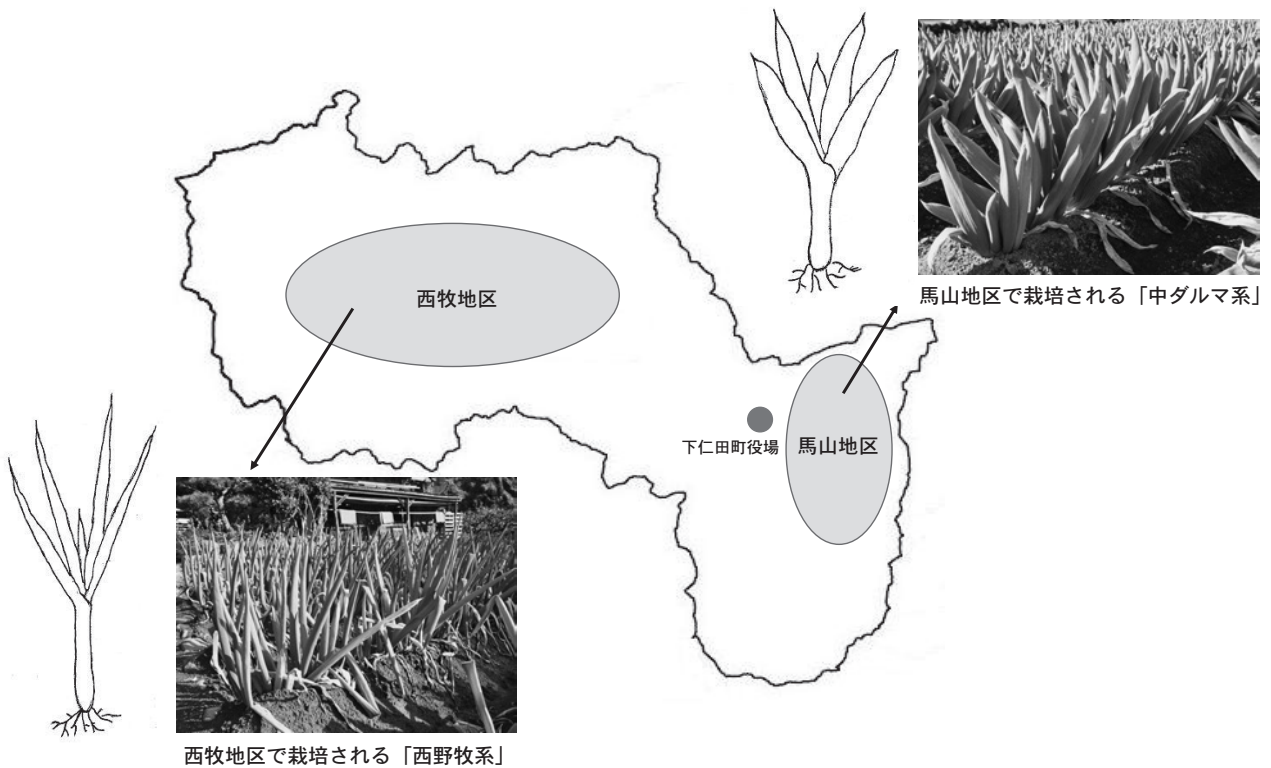
長した苗は、4月中旬～5月上旬にかけて苗床から掘り起こされ、株間 5 cm，うね幅 40 cm程度に仮植される。

仮植された苗はその後、草丈 40 cm程度まで生長し、7月下旬の梅雨明け以降に再度株を掘り起こし、株間 10 cm，うね幅 80 cm程度に植え替え（定植）をする、いわゆる「2回植え栽培」が行われる。

冬を迎えて霜に数回あたり、ネギが甘みを蓄える



第1図 下仁田ネギの栽培体系



第2図 下仁田ネギの栽培地域と系統のちがい

とされる11月下旬から収穫が始まり、年末の歳暮需要にあわせて短期間のうちに出荷・販売が行われる。

とにかく手間のかかる下仁田ネギ栽培であり、特に定植から収穫に至る期間には、さび病やネギアザミウマなどの病虫害防除はもちろんのこと、追肥、中耕、土寄せなどの作柄を左右する重要な作業が続く、きめ細かい栽培管理が求められる。

### 下仁田ネギの系統に関する考察

下仁田ネギには、葉の長さ、葉幅、葉先の形状、葉鞘部の長さ、太さなどの外観の違いからいくつかの系統が知られており、現在、馬山地区を中心に栽培されている「中ダルマ系」と、西牧地区で栽培されている「西野牧系（通称：西牧ネギ）」が代表的なものである（第2図、口絵2-③）。

その他、葉が極端に短い「ダルマ系」や、根深ネギとしての特性が強いとされる「利根太系」と称されるものが知られているが、今日において栽培農家で明確に確認することはできない。

「中ダルマ系」は、「ダルマ系」と「西野牧系」の長所を取り入れて固定されたものとされているが（野口 1973）、確かなことはわからない。葉長は「ダルマ系」よりもやや長い、葉がきれいに互生し、葉の分岐する部分（えり）のしまりが良い。また、「西野牧系」は、葉がやや長めで細く、白根もやや長い特徴がある。ネギは他家受粉作物のため近隣に異品種のネギがあると容易に交雑し、次の世代では本来持っていた形質が失われやすい。西牧や馬山地区の農家は母本選抜と自家採種を繰り返し、異品種との交雑に注意しながら形質の揃った種子を今日まで維持してきた。

西牧地区で古くからネギが栽培されていたこと示すものとして、前述の桜井家文書の中に、1821（文政4）年にネギ800本を江戸に送った記録が見つかり、初めて「西牧葱」の文字が確認できた大きな発見となっている（里見 2013）。また、下仁田ネギの原産地は西野牧小出屋であることが多くの資料に記載されているが（下仁田町 1971, 1986, 2001；上原 1999；上毛新聞社 2014）、この伝承の

発端は、1934（昭和9）年秋に群馬県で実施された陸軍特別大演習に行幸した昭和天皇に下仁田ネギを献上するため、小出屋に栽培圃場が設けられたという事実によるものではないかと指摘されている（里見 2003）。

皇室へのネギの献上は、記録に残っているだけでも、明治から昭和にかけて3回をかぞえ、中でも1941（昭和16）年の献上の際には、神官が正装して圃場に入りネギを掘り取り、それを小学校の校庭に設けられた祭壇に飾った上で、紋付き羽織、袴の人々が集いおごそかに献上祭が執り行われた当時の写真が残されている（今井 1981）。写真のネギは葉や白根の形状から、「西野牧系」が栽培されていたことがうかがえる。

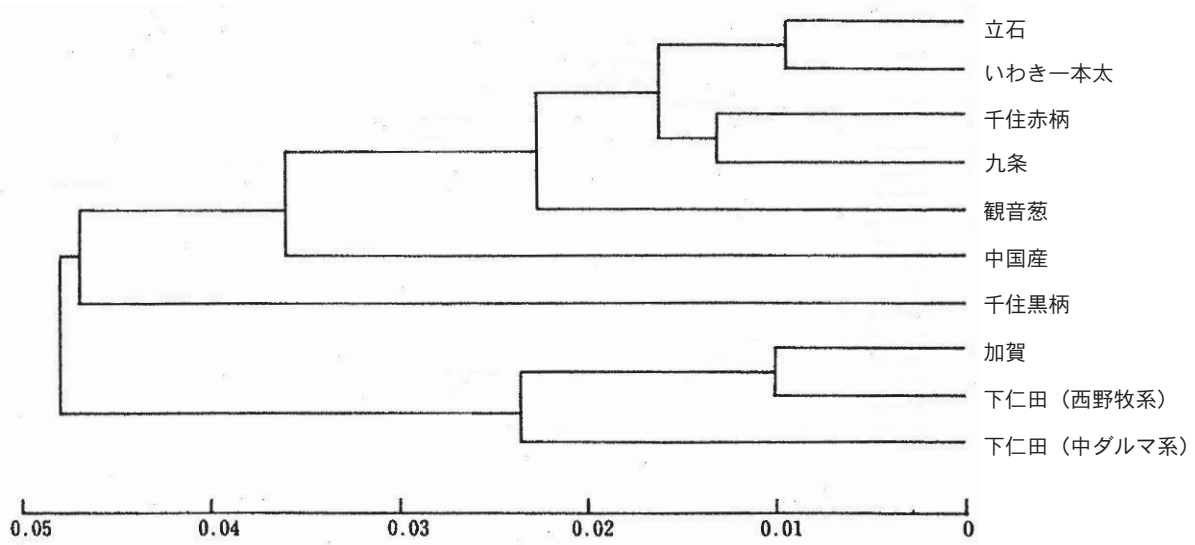
また、1934（昭和9）年に発行された「實用簡便野菜之作方（第十七版）」（池・井關 1934）という野菜栽培に関する書物には下仁田ネギの図が掲載されているが（第3図）、明らかに「西野牧系」と思われ、下仁田ネギは「西野牧系」が主流であったことは疑う余地もない。

圖の葱田仁下



第3図 「實用簡便野菜之作方（第十七版）」に掲載されている下仁田ネギの図

その後、「西野牧系」がやがて西牧地区から下仁田町を中心とした村々の養蚕農家を中心に栽培が広がる過程で、太くてずんぐりした今日の「中ダルマ



第4図 遺伝距離を基に作成したネギ在来品種の系統樹 (Haishima et al. 1993を筆者一部修正)

系」に変化していった。すなわち、「西野牧系」が下仁田ネギの原種であることが通説となっているが、果たしてこれは事実なのだろうか。この疑問について、興味深い研究データを示しながら考察してみたい。

筆者は1990（平成2）年に、千葉大学園芸学部から群馬県庁農業技術課を介して、下仁田ネギの種子の提供を依頼された。当時、千葉大学ではネギ在来品種の遺伝子頻度の研究に取り組んでおり、全国から在来ネギの種子を収集していたため、下仁田ネギもその材料のひとつとして取り上げられたのである。そこで、役場やJAに相談したところ、下仁田ネギの伝統的な系統を維持・栽培する農家として、「中ダルマ系」の永井正夫氏（馬山）と、「西野牧系」の佐藤西造氏（西野牧半弓）を紹介された。早速、両氏を訪問し、研究の意図と種子の分譲を願い出たところ快諾を頂き、これら2系統の種子それぞれ 20 ml程度を千葉大学に提供した。

第4図は、こうして収集されたネギ在来品種の遺伝距離をもとに作成された系統樹である (Haishima et al. 1993)。ネギは大別すると、白根の部分を食べる根深ネギ（白ネギ）の「加賀群」と「千住群」、緑の葉を利用する葉ネギ（青ネギ）の「九条群」の3つになる。そのうち、加賀群は、夏に生長し冬になると地上部が枯れて休眠するため耐寒

第1表 ネギの品種分類

基本的品種群	細分類品種群	F <sub>1</sub> 育種以前の代表的品種
加賀	下仁田	下仁田
	加賀	金沢太, 余目, 源吾, 松本一本太
	岩槻	岩槻, 慈恩寺, 藤崎在来
千住	千住黒柄	黒昇, 吉蔵, 元蔵, 越谷黒, 長宝, 東京夏黒
	千住合黒	石倉, 東京冬黒, 西光, 長悦
	千住合柄	砂村, 尾島, 金長, 西田, 湘南
	千住赤柄	王喜
九条	越津	越津黒柄, 越津合黒
	九条太	九条太
	九条細	九条浅黄, 奴, 観音

※農業技術体系野菜編8-1(農文協 2018)より抜粋

性が強く、分けつすることが少なく白根が太い品種群で、下仁田ネギはこの加賀群に属するものとされている (第1表)。系統樹では、「西野牧系」は「加賀」に近く、少し離れて「中ダルマ系」が位置づけられる結果となったが、ネギ全体で見ればお互い近い関係にあると言え、これまでの生理的な性質による加賀群としての分類を、遺伝的にも裏付けるものとなっている。

第2表は、収集されたネギ在来品種の7つの遺伝子座について対立遺伝子の頻度を示したものである (Haishima et al. 1993)。「中ダルマ系」「西野牧系」では、*Got-1*, *Got-2*, *Lap-1*, *Pgm-1*, *Adh-1*の遺伝子座のうちそれぞれ3つの遺伝子座において、aa や bb などのホモ接合体が100%出現していること



第2表 ネギ在来品種における遺伝子座の対立遺伝子頻度 (Haishima et al. 1993を筆者一部修正)

(遺伝子座)	<i>Acp-1</i>			<i>Acp-3</i>					<i>Got-1</i>			<i>Got-2</i>			<i>Lap-1</i>			<i>Pgm-1</i>			<i>Adh-1</i>			
(遺伝子型)	aa	ab	bb	aa	ab	ac	bb	bc	cc	aa	ab	bb	aa	ab	bb	aa	ab	bb	aa	ab	bb	aa	ab	bb
立石	8	26	77				93	13	1	1	3	59	3	33	75	2	4	105	2	5	22	26	3	0
いわき一本太	4	20	32				46	9	1	0	4	32	0	3	53	0	0	20	4	15	11	20	7	3
千住赤柄	12	27	35				50	0	0	6	11	19	0	1	73	3	16	53	5	14	11	27	3	0
九条	4	16	10				30	0	0	1	0	29	0	12	18	3	7	20	10	9	11	30	0	0
観音葱	6	24	46				73	2	1	4	7	51	4	8	64	23	32	21	2	12	16	30	0	0
中国産	22	46	59	2	5	7	35	24	17	7	17	12	2	17	72	3	16	72	3	15	12	25	5	0
千住黒柄	0	0	72				59	13	0	0	0	48	0	0	72	0	0	72	0	0	30	13	13	4
加賀	18	16	10				37	6	1	0	0	11	0	0	44	0	0	44	0	6	24	24	6	0
下仁田(西野牧系)	6	10	4				11	5	4	2	5	13	0	0	20	0	0	50	1	10	20	30	0	0
下仁田(中ダルマ系)	44	21	5				61	7	2	0	0	70	0	0	70	0	7	61	0	0	30	15	5	10

やabのようなヘテロ接合体の頻度が極端に低いことは、これまで人為的に同系交配が進んだ結果とも言え、系統としての固定がかなり進んでいるものと考えられる。種子の提供を受けた佐藤氏の半弓地区は山あいの小さな集落で、近くに異品種のネギがない限り交雑はありえない地形である。また、先代から受け継いだネギを大切に維持し、交雑しないよう注意して自家採種を続けてきたとの証言を佐藤氏から得ており、「西野牧系」としての固定度はかなり高いものであったと考えられる。こうしたことは、栽培農家の採種母本を見極める高い観察力と、交雑を防ぐため異株を排除することが徹底して行われてきたことの証であり、高く評価されるものである。

原種の定義として一般的に、「動物や植物の種類のもとになる種あるいは型を指す用語で、ひとつの種類の中にいくつかの地方的な型(亜種)あるいは品種が見られる時に、それらの祖先型にあたるもの」とされている。「西野牧系」と「中ダルマ系」を比較すると、遺伝子座 *Got-1* と *Pgm-1* において、「西野牧系」にはあるが「中ダルマ系」にはない遺伝子型が出現している。一方、遺伝子座 *Lap-1* と *Adh-1* では、逆に「中ダルマ系」にはあるが「西野牧系」にはない遺伝子型も出現しているが、残念ながらこのデータだけでは「西野牧系」が「中ダルマ系」の原種であるかを判断することはできない。ただ、遺伝的に近いとは言え、「西野牧系」から少し離れて「中ダルマ系」が系統樹で位置づけられるということは、「西野牧系」が何かしらのネギと交

雑し、「中ダルマ系」が成立した可能性は完全に否定されるものではないと考えている。

もうひとつ、「西野牧系」と「中ダルマ系」の関係性を示す事実を紹介したい。西牧地区で行われていたネギ栽培は、1872(明治5)年に官営富岡製糸場が操業すると、生糸商人が歳暮や土産などに下仁田ネギを使うようになったことから需要が急速に増加し、下仁田町を中心とした村々に栽培が広がっていった。その後、大正時代に入って現在の生産の中心である馬山地区でも盛んに栽培されるようになったとみられている(下仁田町 1986)。下仁田町史(1971)には、1921(大正10)年の馬山村の農業のようすが紹介されており、村内で「葱」が二町二反(約2.2 ha)栽培されていたことが記載されているが、おそらくこれは下仁田ネギと思われる。

馬山地区では昭和に入ると、戦中から戦後の混乱の中で採種母本の選抜がおろそかになり、交雑や管理不十分のため下仁田ネギ本来の草姿を失っていった。

こうした惨状を憂い、今日の産地の礎を築いたのは馬山地区の松浦源一郎氏である。松浦氏は1945(昭和20)年に復員すると地元農家で組織する「田城農事研究会(以下:田城農研)」の会長に就任し、形質の乱れていた下仁田ネギを戦前の姿に戻すことを目的に、1952(昭和27)年から品種改良試験を開始した(松浦 2001)。

筆者はかつて松浦源一郎氏から、当時の品種改良についての話を聞いている。試験には、馬山地区の

ネギとして松浦氏が維持していたものに加え、葉の短いダルマ系とされた堀口政太郎氏、葉が太くて長いやや軟弱な生育をする瀬間吉治氏の3系統を選んだ。さらに松井田町の2農家で維持されてきたものも含めて、計5系統を同一圃場に植え付け選抜試験を開始した。生育が良好で病害にも強く、味が良いことを育種目標に自然交配による選抜・採種を行い、5年がかりで今日見る下仁田ネギを復活させ、地域の農家に種子を配布したという。

一方、下仁田町史（1971）に掲載されている、田城農研の試験内容を示す看板（第5図）には、上記の5農家に加えて「西野牧系」（西牧系と記載）も植えられていることがわかる。すなわち、松浦氏が復活させた系統は、「ダルマ系」と「西野牧系」の形質が少なからず入っているものと思われる。このことが、「中ダルマ系」が「ダルマ系」と「西野牧系」の長所を取り入れて育成されたとの伝承の根拠になっていると思われる。おそらく、大正～戦前期のネギの姿に戻すには、「ダルマ系」と「西野牧系」の形質を導入して、ゼロから品種改良をやり直すほど、形質が乱れていたのではないだろうか。

実は「中ダルマ系」の名称がいつから使われているのか、筆者は把握できていない。松浦氏の証言を顧みると、復活させた当時は「中ダルマ系」とは明確には言っていなかったようである。今日「中ダルマ系」と言っても、F<sub>1</sub>品種のように遺伝的に定まったものではなく、「ダルマ系」よりも葉が長く、「西野牧系」よりも葉幅が広くて、ややずんぐりした草姿のものを総じてそう呼んでいるに過ぎず、葉先の

形状や葉の長さなどで栽培農家間に微妙な違いが見られる。これは、かつて松浦氏によって種子が配布されたものの、その後各農家が独自の視点で母本選抜を繰り返してきたことや、種子の配布を受けずに、もともと家に代々受け継がれてきたネギを守ってきた農家もいたことが要因であろう。仮に交雑しても極端に形状が異なるネギは生まれず、馬山という限られた地域の中で「集団」として今日まで系統が維持されてきたものと考えられる。30年前の馬山地区では「中ダルマ系」よりも、「松浦系」のように農家の姓を冠した系統名で呼ぶことの方が一般的であった。千葉大学に提供した系統も、「永井系（中ダルマ系）」と呼ばれていた。

他の地域でも、下仁田ネギによく似た在来ネギが古くから栽培される産地がいくつかある。そのひとつとして、伊勢崎市下植木地区には江戸時代から伝わる「下植木ネギ」という伝統ネギがある（第6図）。1798（寛政10）年に伊勢崎藩家老が著した「伊勢崎風土記」には、「葱、下植木村に出ずるもの最も美味なり」と記載され、安政年間には下植木ネギを江戸へ送った記録が残されている。大正時代になると伊勢崎銘仙の織物業者が歳暮としてネギを全国に送るようになったが、戦後の洋装化の波を受け銘仙の生産が衰退する中で、栽培も減っていった（上毛新聞社 2001）。形状は「中ダルマ系」よりも葉が長く、根部がらつきょうのようにふくらんでいるのが特徴である。



第5図 田城農研の看板



第6図 下植木ネギ



第7図 宮ネギ

また、栃木県栃木市宮町には「宮ネギ」という伝統ネギがあり、別名「ダルマねぎ」とも呼ばれている（第7図）。江戸時代には栃木の商人が江戸の地頭役所に出向く時に持参したところ、その味や風味が評判となり歳暮として江戸に毎年贈る習慣が生まれたと言う（栃木県野菜研究会 1999）。

両者とも江戸時代には産物として江戸へ送られたこと、明治以降は商人が歳暮や土産として扱ったこと、自家採種でこれまで維持されてきたことなど下仁田ネギの歴史と共通的な事柄が非常に多い。また「宮ネギ」は、葉長が極端に短くずんぐりした草姿であることから「だるま」を連想して「ダルマねぎ」と呼ばれていると思われるが、下仁田ネギにも「ダルマ系」「中ダルマ系」という言葉があることから、両者と下仁田ネギには深い関連性があると思わざるを得ない。

このように考えると、馬山地区には「ダルマ系」かどうかは不明であるが、原種と位置づけられる何かしらのネギがいつの時代にかすでに土着し、大正期に西牧地区から広がった「西野牧系」と交雑していったと見る方が自然ではないかと思うのである。そして、戦前の形質の乱れと戦後の復活を経て、今日の「中ダルマ系」が存在するのではないか。つまり、「西野牧系」は原種というよりは、「中ダルマ系」の育成に深く関与したとの表現の方が正しいと思われる。

今後、下仁田ネギに関わる新たな史料が発見され

るとともに、加賀群のほかさまざまな種類のネギの遺伝子解析が進むことで系統樹の精度が増し、遺伝的多様性や品種分化の関係が明らかになることを期待している。

### 下仁田ネギの「2回植え」に関する考察

下仁田ネギは、夏に植え替え（定植）をする「2回植え栽培」が伝統的に行われ、その後の生育や品質向上に大きく寄与する技術として受け継がれてきた。1934（昭和9）年に西野牧小出屋で作付けされた皇室献上ネギの栽培記録である「献上葱奉耕日誌」には、4月23日に仮植、7月7日に定植したことが記録されているので（里見 2013）、古くから2回植え栽培が行われていたのだろう。

しかしながら、真夏の炎天下で行われるこの作業は大変過酷なものであることから、近年では種子を2月頃に播いて5～6月に苗を植え付け、そのまま植え替えを行わないで12月に収穫する、いわゆる「1回植え栽培」が下仁田町以外の地域では多くなっている（渡辺 2005）。

2001（平成13）年に発足した「下仁田葱の会」では、伝統的な2回植え栽培を遵守していることは周知の通りであるが、省力化・軽労化を図るため、簡易植え穴あけ器具（第8図）の導入など、植え替え



第8図 簡易植え穴あけ器具



作業が効率的に行えるような技術改善が農家で図られている。

では、下仁田ネギは何故2回植えを行うのだろうか。全国のネギの栽培方法を調べると、2回植えを行うネギには「曲がりネギ」が多い。曲がりネギとは、ある程度育ったネギを一度抜き取り、その苗を傾斜をつけた植え溝に寝かせて栽培するもので、その後先端部が起き上がって成長するため、曲がったネギとして収穫されるのである。このような栽培方法は、畑の地下水位が高くて水はけが悪い、作土層が浅いため苗の深植えができないなどの条件を克服し、白根の長いネギを収穫するための工夫から生まれたものである（佐藤 2021）。また、食味などの品質向上を目的としている。

2回植えをする曲がりネギの例をいくつかあげてみよう。福島県郡山市の「阿久津曲がりネギ」は、1897（明治30）年頃、富山の売薬行商人が伝えた加賀群のネギの栽培から始まったものと伝えられている。阿久津地区は畑の土壌が粘土質で作土が浅かったため、苗の植え替え時に斜めに植えるようになったという（佐藤 2021）。その効果として、盛夏期に植え替えることで、葉鞘が柔らかくなり、糖含量が増加することが報告されている（緑川 2007）。

長野県松本市の「松本一本ネギ」（第9図）は加賀群に属するネギで、江戸時代には盛んに栽培されていたという。夏の土用に植え替える2回植えが行われ、ネギ株の若返りを施すことが目的と言う（大井・神野 2002）。また、寝かせて植えることでネギ



第9図 松本一本ネギ

が上へ伸びようとストレスを感じ、甘く柔らかく育つとされている。当地域は、内山峠を越えて西牧地区との交流があったことから、「西野牧系」との関連性が指摘されている（里見 2013）。

栃木県宇都宮市新里町の「新里ネギ」<sup>にっさと</sup>は、江戸時代末期から自家採種により栽培されてきたネギである。この地域は小石混じりの粘土質土壌で、水分を含んだ後乾燥すると固まってしまい、鍬を使っての手作業では深く掘ることができなかつたため、浅く掘った溝にネギを斜めに寝かせて植えるという（佐藤 2021）。

こうした2回植えを行う技術は古い書物でも紹介されている。農家の小学子弟に農業の概略を教えるために明治14年に刊行された「校刻小學農業書」（塚原 1881）の「葱」の項には、「葱は八月の頃、種を下ろし、（中略）翌年四五月の頃、別地に移し、耕すこと五六回、十月より掘取るなり。或は白根の極めて多からんを要すれば、八月下旬に再び深く植易うべし。上州下仁田、野州千手、武州岩槻産の者、最も世に名あり。」と記述されている。当時から、白根を長く確保するため夏の植え替えが指導されていたことがうかがえる。また、名声の高いネギとして下仁田ネギが列挙されていることも興味深いところである。

下仁田町周辺は小石混じり、あるいは礫混じりの重粘土と称され、降雨後に乾燥すると土が極めて硬くなるなど、本来、根深ネギのように長い白根を形成させる栽培に適した土壌とは言いがたい。曲がりネギの事例や書物に書かれていることを総合的に考慮すると、おそらく下仁田ネギの2回植えの当初の目的は、白根の確保にあったと思われる。そして植え替え時には、斜めに寝かせて植えていたため、曲がりネギだったのではないかと推測している。

筆者は30年ほど前に高齢の下仁田ネギ生産者から、「昔の植え替えは、植え溝を掘り傾斜をつけた土の上に寝かせて根の部分だけ土をかけ、真夏の直射日光に数日当ててから、白根まで土をかけたものだ。」との証言を聞いたことがある。白根部分を太陽光で殺菌していたとのことであるが、その効果の真偽はともかくとして、そのような栽培方法が一部



の農家で行われていたことは事実と思われる。

その後、下仁田ネギは歳暮や土産需要が高まる中で、白根の曲がりのない商品性の高いネギが求められるようになり、今日のように植え替えをする時には真っ直ぐに立てるようになっていったと考えている。

下山 (2021) は、「下仁田の重粘質で深く耕せない土壌条件の中、下仁田ネギ栽培では土寄せをして白根を長くすることができなかつたため、土地生産性を高めるため白根を太く育てる必要があった。このため、15ヶ月もかけてじっくりと手入れをし続ける作付体系が確立された。」と述べている。2回植えは、白根の長さの確保の目的から、株間を広げることによって栽培期間を長く取り白根の太さを確保する技術へと目的を変化させていったと考えられ、重粘土壌がもたらした下仁田ネギならではの栽培方法といえるだろう。

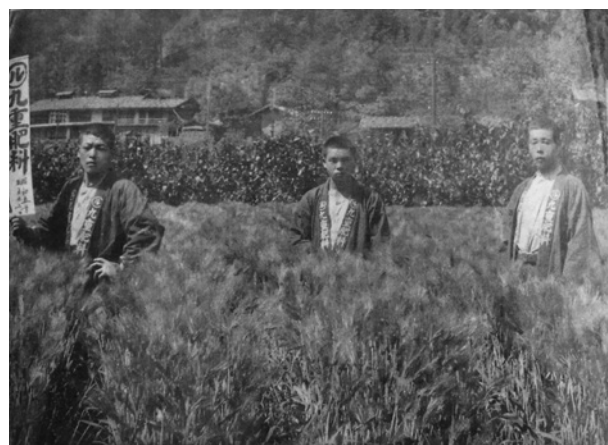
筆者は先般、某古書店で、明治31年に刊行された「農業蠶業帝国農民術要」(下山 1898) という書物を発見した。これは、水稻、小麦、野菜の栽培や養蚕の勘所をまとめたもので、農蚕業の改善を志す群馬県内の農業者を会員として募り無償配布されていたものらしい。この中に「下仁田葱栽培実験」という項があり、「播種は四月上旬三尺幅の畦を造り(中略)六七寸に生長せる苗を七八寸隔に一本づつ植付け(中略)採取は九月頃より……」と記述され1回植え栽培が紹介されている。栽培実験ということであるから、おそらく著作者が試験的に栽培したことに基づくものだろうが、下仁田ネギの栽培は県内の他の地域では2回植えの必要性はあえてなく、1回植えを提案しているものと思われる。

もうひとつ2回植えが行われてきた理由と考えられるものをあげてみたい。筆者はかつて松浦源一郎氏から、「昔は麦あとにネギを植え替えたものだ。麦を収穫した後の畑は土が萌えていて良いネギが育った。」との話を聞いたことがある。

前述のように下仁田町史 (1971) には、1921 (大正10) 年の馬山村の農業の一端が記されている。当時、馬山村で作付けの多かったものは、里芋、蒟蒻芋、甘藷、大豆、馬鈴薯、小豆、大根、こうぞ、

葱、大麻の順で、以下、茄子、漬菜、そば、牛蒡、とうきび、あわ、きび、ひえ、胡瓜などが続く。一方、馬山村が村外から購入したものとして、米、大麦、大豆、味噌、醤油、小麦粉、肥料などである。水田の少ない馬山村では、米を最も多く村外から購入していたようである。大麦や小麦粉の購入量も多いことから、麦類の作付けは村内でまだ行われていなかったと思われる。

筆者は数年前に、馬山地区の農家出身で現在町外で暮らす方から、実家の納屋にあったとされる古い写真を提供された(第10図)。馬山村内で撮影されたと思われるもので、不鮮明ではあるがそこには広大な麦畑が広がっており、芒<sup>のぎ</sup>が長いことから大麦であると考えられる。大麦は押し麦にして米を補う形で食されていたのだろう。左端の男性が持つ立て看板には「昭和五年五月廿三日」の文字が見えるので、撮影時期を特定できる。この頃には、大麦の栽培が馬山地区で広がっていたと思われ、男性達が着ている半被には肥料商の屋号が読み取れることから、大麦栽培の肥料効果試験のようなことを現地で行った記録写真かもしれない。



第10図 昭和初期の麦作

大麦の収穫が6月であることを考えると、後作に下仁田ネギの植え替えを行うことは十分に可能で、畑の効率的な利用や輪作の面で理にかなっている。土壌が柔らかく良い状態で保たれたことからネギの収量があがり、2回植えがこれまで以上に下仁田ネギの重要な作業として定着していったのかもしれない。

い。また、それまで植え替え時期が農家によってまちまちであったものが、大麦の収穫が植え替え時期の共通の指標となったことで、生産者間の生育のばらつきや品質の統一につながり、下仁田ネギの名声をますます高めていったと思われる。現在に至っては大麦の栽培は見られなくなったが、植え替え時期だけが名残として受け継がれているのではないだろうか。

今日一般に言われている2回植えの目的として、

(1) ネギ萎縮病ウイルス感染株や生育不良株を除去する、(2) 根を切ることで新根の発生を促す、(3) 生育を揃えることで、その後の管理作業がやりやすくなる、(4) 食感が柔らかいネギに仕上がる、などがあげられるが、これらは農業技術者等が後世になって理由付けしているもので本質的なものではないと考えている。そこには、下仁田の農家の長年にわたる農業の営みと経験から生まれた崇高な農業技術の一端をうかがうことができるのである。

## おわりに

下仁田ネギは下仁田町を代表するブランド野菜として、これまで多くの書物や資料でその来歴や栽培について語られてきた。しかしながら、正確な記録として残されたものが少なく、ある資料に書かれた不正確なことが別の資料に引用され、それがやがて事実として定着していった部分が多い。幸い、里見哲夫氏によって多くの情報が整理され、下仁田ネギの歴史を次代に伝える素地ができつつあると感じており、氏に深く敬意を表するものである。

下仁田ネギは「ねぎとこんにゃく下仁田名産」と上毛かるたに詠まれ、小学生時代を本県で過ごした者であれば、必ず記憶しているフレーズである。しかし地域によっては子供育成会活動の停滞により、上毛かるたを経験することなく成長している子供達が少なからずいることは寂しい限りである。下仁田ネギを次世代に伝えていくには、子供達に生産現場や料理などの食文化に触れる機会を多く設けるなど、ネギに親しみを持ってもらう活動が重要であり、地道な活動を継続すること必要であろう。

下仁田ネギの生産現場では農家の高齢化や栽培面積の減少、地球温暖化による栽培技術の見直し、新たな病害虫の発生など取り巻く環境は厳しくなっており、下仁田ネギのブランドや栽培技術の継承に危機感が増している。こうした中、Uターンや移住で下仁田町に就農し、ネギ栽培を始める新たな担い手が少なからず育っていることは喜ばしいことである。

江戸時代から続く下仁田ネギを絶やすわけにはいかない。時代の変化に対応し、下仁田ネギの伝統と産地を守っていくことが求められている。

## 謝 辞

本稿は筆者が下仁田町で在職中、故松浦源一郎氏をはじめ多くの農家の方からご教授頂いたことを基に考察したものである。この場を借りて、改めて諸氏に対し御礼を申し上げる次第である。

## 文 献

- 池 久吉・井關十二郎 (1934) 實用簡便野菜之作方 第十七版. 昇文堂, 99p.
- 今井幹夫 (1981) ふるさとの思い出写真集 明治大正昭和 富岡・甘楽. 図書刊行会, 81p.
- 上毛新聞社 (2001) 季刊上州風, 第9号, 8-25.
- 上毛新聞社 (2014) 下仁田ねぎの本, 30p.
- 菊地俊夫・永井尚寿 (1986) 群馬県下仁田町におけるねぎの生産形態. 新地理34(1), 11-23, 日本地理教育学会.
- 松浦源一郎 (2001) 葱と蒟蒻と椎茸と共に生きた 松浦源一郎の八五年. 平成出版, 37-51.
- Haishima M, Kato J and Ikehishi H (1993) Isozyme Polymorphism in Native Varieties of Japanese Bunching Onion (*Allium fistulosum* L.). Japan. J. Breed, 43, 537-547.
- 緑川弥寿彦 (2007) 阿久津曲がりねぎの植え替えと冬期の品質. 平成19年度東北農業研究成果情報 HP (<https://www.naro.affrc.go.jp/org/tarc/seika/jyouhou/H19/seika-index.html>). 最終アクセス2021.12.
- 野口 昇 (1973) 深耕一畝厩肥多投一木炭施用一適期管理 秋まき翌年冬どり栽培 (下仁田. 中ダルマ系). 農業技術体系野菜編8-1, (社) 農山漁村文化協会, 応13-21
- 大井美知男. 神野幸洋 (2002) からい大根とあまい蕪のものがたり. 長野日報社, 43-46.
- 里見哲夫 (2003) 下仁田ネギーその来歴を追ってー. 下仁

- 田自然学校文庫1, 36p.  
里見哲夫 (2013) 新版下仁田ネギ. 下仁田自然学校文庫7, 79p.  
佐藤 茂 (2021) 近江を中心とした伝統野菜文化史. 養賢堂, 18-19.  
下仁田町 (1971) 殿様葱. 下仁田町史, 27-29.  
下仁田町 (1986) 下仁田ネギの歴史と栽培, 2p.  
下仁田町 (2001) 下仁田名産ネギと蒟蒻, 2p.  
下山 淳 (2021) 下仁田町のコンニャクと土壌. 下仁田町自然史館研究報告, 6, 17-26.
- 下山作太郎 (1898) 農業蠶業帝国農民術要. 上毛成業社, 161-162.  
(社)農山漁村文化協会 (2018) 農業技術体系野菜編8-1追録第43号. 基4p.  
栃木県野菜研究会 (1999) 栃木の野菜, 213-214.  
塚原苔園 (1881) 校刻小學農業書 上巻. 博文堂, 40p.  
上原安男 (1999) 下仁田ネギ由来譚. 季刊群馬風土記57号, 42-44.  
渡辺 悟 (2005) 変わる下仁田ネギ産地. 農林水産技術研究ジャーナル28(1), (社)農林水産技術情報協会, 13-14.

(要 旨)

渡辺 悟 (2022) 下仁田ネギの栽培に関する一、二の考察. 下仁田町自然史館研究報告, 7, 21-31.

千葉大学の研究によると, 下仁田ネギの「中ダルマ系」と「西野牧系」は同じ加賀群に属することが遺伝的にも確認され, 系統としてかなり固定が進んでいるものと思われた. また, 「西野牧系」は下仁田ネギの原種であることが一般に言われているが, ネギ在来品種の系統樹の遺伝距離や, 県内や近県に下仁田ネギに形状がよく似た在来ネギが存在することから, むしろ馬山地区にもともと土着した原種ネギに「西野牧系」が交雑して, 今日の下仁田ネギが成立したことが推測された. 下仁田ネギは「2回植え栽培」が一般に行われているが, この技術の確立には当地域の小石混じりの重粘土壌が関係していると思われ, 白根の長さを確保することが当初の目的であったと考えられた. また, 馬山地区で始まった大麦栽培との輪作が, 2回植え栽培の定着をうながしたと考察された.



